

# 本学会の活動と今後の展望

## The birth and growth of our Radiological Nursing Society

小西 恵美子

Emiko KONISHI

長野県看護大学 名誉教授／鹿児島大学医学部 客員研究員

Professor Emerita, Nagano College of Nursing

Visiting Scholar, Faculty of Medicine, Kagoshima University

放射線看護が主に診療の場で進展してきた途上で福島原子力発電所事故が起こった。ここで気づいたことは、従来の放射線看護は地域・公衆衛生看護の視点を欠いていた、今後は看護と放射線との関わりを病院中心から地域へと広げなくてはならない、ということであった。ICRPは、「公衆の健康と教育を担う専門職による実際の放射線防護文化の普及が災害復旧の鍵である」と、保健師を含む地域の実践家への期待を表明している (Publ 111)。

日本放射線看護学会はこれらの状況を踏まえて2012年に設立された。設立趣旨は、「臨床、地域、産業等、看護活動の場を横断して、放射線にかかわる看護実践と知の集積を目指す」、「平常時はもとより、事故・異常、緊急時の放射線看護も探求する」ことを述べ、世界に類がなく、世界が注目する日本の放射線看護が重視していくべきいくつかをここに込めた。

講演では、上記背景をもつ本学会創立期の目標と成果を振り返り、学際的協働への課題と期待を、実践、教育、研究の視点で、自身の体験を加味しつつ述べ、以下を強調した。

- ・ コラボレーション（協働）とは、複数の個人や組織が共通の目標に向かって共に働くプロセスである。知識を共有し、共に学び合うことを通してこのプロセスは創造的なものになる。尊敬と信頼をベースとした同僚関係（colleagueship）が協働の基本である<sup>1)</sup>。
- ・ 学際的な協働は研究を促進し、それが学際的な教育や実践を生み、またそれが学際的な研究・教育に還元される、という循環をつくる。
- ・ 看護における学際的協働を促進するには、看護専門職の中だけでなくより大きな社会の中に立っているわれわれは、「看護とは何か」および「看護は何をするのか」の両方を踏まえ、はっきりと意見を表明する必要がある。

### 引用文献

- 1) Davis AJ. 実践・研究・教育の協働における倫理：学問の発展とよりよい看護ケアのために. 日本看護倫理学会誌. 2010, 2(1), 50-62.